

仕事、勉強、体力と大きく成長。  
生産性は2倍以上に

—株式会社クレール—

職場  
レポート

EMPLOYMENT REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



株式会社クレール

〒522-0314 滋賀県犬上郡多賀町大字四手字諏訪348  
TEL 0749-48-2234 FAX 0749-48-2239



参天製薬の特例子会社「クレール」では、知的障害者が無塵服・無菌服などのクリーンクリーニングを行っている。作業環境はクラス一〇〇〇〇。つまり、空気一立方フィートの中に直径〇・五ミクロン（二〇〇〇分の一ミリ）以上の粒子が一万个以下。もちろん目には見えない。その中で、手際のいい作業が続く。操業して六年。生産性が二・二三倍に伸びたという職場をご紹介します。

### 外部委託業務から クリーニングを選ぶ

参天製薬は、シエアが四〇%を超える  
医科向け目薬を主力に、手術用具やリユ

高田和重社長



ーマチ薬などを製造している。東海道新幹線の米原駅から車で二十数分、琵琶湖東岸の彦根市近くにある「びわ湖東部中核工業団地」内の滋賀工場の一角に、一九九八年八月に操業を始めた参天製薬の特例子会社「クレール」がある。設立当時を知る、滋賀労働局職業安定部

地方障害者雇用担当官の小島正明さんに会社まで案内いただいた。社長の高田和重さんは三代目で二〇〇四年一月に、工場長の長友朗さんは二代目で二〇〇二年秋に就任した。長友さんは参天製薬人事部で、クレールの立ち上げからかかわってきた。

「一九九五年に滋賀工場ができるとき、製造担当の人たちの採用をしていて、ハローワーク彦根の所長から『障害者雇用はどうなっていますか』と聞かれました。製薬会社には厳しい基準がたくさん

あって、法定雇用率は達成しなければならぬと思っていました。そのすべがわかりませんでした。そのとき、特例子会社の制度があると教えていただきました。私は、働く意志と能力を持ちながら、就職の機会に恵まれない人たちに職場を提供したいという思いがありました」

何の仕事をするかの検討を始めると、参天製薬が外部委託している業務では、クリーニング代がいちばんかかっているのがわかった。長友さんは以前勤めていた会社で聴覚障害者を雇用していた経験から、聴覚と知的の障害者の雇用を考え、たまたまハローワーク管内に就職希望の聴覚障害者がいなかったため、知的障害者の会社とすることにした。

「参天製薬の取引先のクリーニング会社が増えるということでもちょうど工場を拡大したばかりでした。事情を説明すると、常務が『わかりました。協力させてもらいます』と言ってくださいました。ハローワークに支援していただき、エプソンミズベさんに教えていただき、たいへんでしたが楽しかったです」

一九九七年四月、役員会の承認を受けてクレールを設立。ハローワーク、先輩企業、取引先といひ出会いがあつて準備は順調に進み、九八年四月に知的障害者一〇名を採用した。

クレールの社名は、フランス語で「透明な」という意味。「純粹で」「素直で」



入荷した洗濯物の仕分けとポケットの中の忘れ物チェック

という意味もある。一人ひとりの能力を生かし、企業活動を通して社会に役立ちたいと願う気持ちをこめ、経営理念は「信頼される技術とたゆまぬ工夫で、優れたクリーニングサービスを提供することによって、社会のお役に立つ」とうたった。

なお、参天製薬では聴覚障害や下肢障害、内部障害の人たちが働き、クレールと合わせた障害者雇用率は二％を維持している。

## ■ みんなで考えた社員目標を毎朝唱和

一九九八年四月から操業開始の八月までの四カ月間は、服のたたみ方、数の数え方などの訓練をした。

「まず五個、一〇個ずつのかたまりを作りました。五、一〇の単位にするコツをわかれば、そのかたまりを数えれば三〇〇ぐらいまで数えることができます。いまは六〇個ぐらいは数えることができますね」

初代のスタッフは知的障害者と接した経験はなく、一年半ほどは障害者施設のOBを雇用し、カウンセラーとして勤務してもらった。長友さんは人事部に籍をおき、社外取締役としてかかわった。

「二人の女性スタッフも熱心に教えてくれました。最初は家族的になかよくなることからスタートしましたが、彼らには成長して社会的に自立してもらわなければいけません。仕事が目の前にありますから、失敗したら『どないするんや』と突き詰めていけるところが、福祉と違うところですよ。四年目に入り、企業としての基盤をしっかりと体系づけたものにするには、人間が変わったほうが切り替えやすいので、二代目社長と私がありました。シナリオとしてはよかったです」

現在、従業員は一八名。社長、工場長、グループ長の三名が参天製薬からの出向で、知的障害者一二名にスタッフが三名いる。

「みんなが考えた今年の目標、今月の目標を集約したら社員目標ができました。全員の意見が入っていますので、毎朝唱和して仕事を始めます。親会社の人たちがびつくりするくらいきちんとあいさつをしますよ」

クレールの社員目標は「礼儀正しくあいさつをします」「みんなで協力して仕事をします」「仕事が正確に、はやくできるように努力します」「安全・清潔・健康に心がけ、働けることに感謝します」「広く社会に参加し、自立するための勉強をします」――

長友さんは、第一に働く意欲を求めている。

「いちばんに働く意義を理解してほしいと思います。学力や手先の器用さは二の次です。またグループで仕事をするので、協調性は必要です。対人関係を作るのが苦手な人が二人いて、最初は輪の中に入ってきませんでしたが、時間ばかりりましたが、だんだん入ってくるようになってきました」

## ■ 品質で勝負。質の高いクリーニング

事業内容は、九〇％近くがクリーニングで、大阪の三工場を主に、半導体、電子部品製造などの外部企業からも受注している。

「サービスの質が高いとおほめの言葉をいただいています。できあがりの製品で勝負していますので、障害者が働いているとはご存じない取引先もあります。最初は親会社のクリーニングだけを考えていましたが、いまは外注が二三％になっています。営業活動も、ハローワーク



乾燥機は多い日で1台10回は稼働する

## WORKSHOP REPORT



仕分けを終えたものを洗濯機へ

にサポートしていただきました。きつかけができますと、同じ会社の別工場からも受注をいただき、広がってきました」  
クリーニングの一日の処理枚数は、ワンピース型の無菌・無塵衣が七〇〇枚、手袋などの小物一七五〇枚、靴一二〇足……専用トラックで入荷した洗濯物は、まず仕分けをする。

「ポケットの中にボールペンや小銭などが入っていないかを調べます。印鑑やめがねなど、昨年四月から十二月までで五〇〇個見つけました」

汚れのひどいものは予備洗いをし、洗濯、乾燥、折り畳み、袋詰、滅菌、外袋詰、コンテナに収納して、出荷する。

クリーンルームでの作業は、つなぎの防塵服に専用の靴、ヘアキャップ、マスクにフードをかぶり、手袋と、露出部分は目だけ。室外から中の作業風景を見ると、工場長の長友さんは誰が誰だかわかるそうだが、私たちには見分けがつかない。障害があるとは思えない手際とスピードで、それぞれの作業が進んでいる。

「初めは服を着るのめんどくさいけど、いまは次に何をしなければいけないかがわかっていますし、作業の細かい手順や約束事がきちんと守られています。新入社員の家族には半日同じ作業をしてみますが、五年経ってお母さん方に久しぶりに作業をしてみたら、お子さんの作業の早さに驚いていました」



使用するカゴも分別

そのほかに、滋賀工場内で薬を作る工程の準備作業と緑地管理などを請け負い、四名が働いている。フォークリフトを運転できる人もいる。

「養護学校から職場実習の依頼があると、すべて受け入れていきます。雇用はなかなか増やせませんので、実習は引き受けなければと思っています」  
今春、また仲間が一名増える。

### スポーツを奨励、ボランティア活動も

朝礼の司会は、知的障害者たちが順番で行い、新聞記事で気になったこと、自分で思うことなどを発表して、その日の作業スケジュールを確認する。



「月曜日にはどの会社のものが何時に入ってくる、それは何時に出さないといけないとか、曜日によって異なる入出荷企業をきちんと報告できるのがすごいと思います。言えないのは私と社長の二人だけです」

給料は約一三万円。賞与は年二回。月六万円の財形貯蓄に励む人もいる。免許をとって車通勤する人が三名。自転車組もいるが、最寄りの南彦根駅からはワゴン車での送迎もある。

二カ月に一回は、ボーリング、お花見、社員旅行などの社内イベントがある。

「近くの重度障害者施設の運動会と学園祭にボランティアとして参加しています。琵琶湖の河川の清掃もします。自分たちが助けられているという気持ちに加えて、支援するという気持ちをもってほしい。もつと重度の人たちに何かをしてあげるのとはとてもいい経験だと思っています。休日にはボーリングに行く仲間、魚釣りに行く仲間ができています。家でゲームしかしないグループは体力がないです」

その体力が問題で、最初に体力測定をしたときはなんと六〇代だった。



ものや仕様によって乾燥時間等が異なるが、それぞれに対応して作業を進める



「いま社員の平均年齢は二四・六歳ですが、最初の体力測定の数値が六三歳ぐらいでした。初代社長は、運動をほとんどしない人にバドミントンの羽根をたくさんつかせたり、土日に好きな自転車であまりを走らせたり、スポーツを積極的に勧めました。体力増強をはかってきて、昨年は五〇代です。いかに体を動かしてこなかったかだと思います」

地元のサッカーチームに三名、ソフトボールチームに二名、太極拳に一名と、スポーツ活動に参加している。体力は、学校教育の間にしっかりと鍛えてほしい。

## 自主勉強会、 作業日誌で力をつける

操業以来、毎朝八時半から三〇分、自主勉強会を続けてきた。科目は算数、国語、地理、手話、パソコン。算数と地理は社長の高田さんが担当する。

「朝の勉強会は楽しいですね。彼らは行動範囲が狭いので、日本全体ぐらいは知るようにと、観光、歴史、遊ぶところ、食べ物などを取り上げて、四七都道府県の半分ぐらいまできました。彦根からどう行けばいいかなどを話すと、興味があるようです」



仕上った服をたたみ、作業靴の番号を合わせ袋詰めする



一人で信楽に行って焼き物に挑戦したり、レジャーランドや南紀まで出かける人もいる。手話は工場長の長友さんの担当だ。いま、全員で漢字検定八級をめざしている。

「反復と継続が大事ですね。勉強会で算数を始めたときは小学二年生ぐらいでしたが、いまは四年生の三学期ですから、

出荷数を数えて伝票に記入する



大したものだと思います。漢字を一つ書けるようになった。検定の八級を通る。掛け算ができるようになることは、仕事以外の大きな目標になっていると思います」

また、作業日誌も毎日続けている。「日々の状況、課題を家族の方に知っていたらこうと続いています。家族会も半期に一回開いています」

作業日誌に一言コメントをつけるのは社長の高田さんの役目。書かれた内容に合わせて、話題は世界の異常気象から、ノロウイルスまで。わかりやすく、心のこもった内容に頭が下がる。

「内容が変われば、コメントが書きやすいのですが、書いてくる内容が毎日ほぼ同じですから、話題がむずかしいですね。お母さんがコメントしてくれる人も何

## WORKSHOP REPORT



休息時のクレールの皆さん

人かいますので、中心は社員へのメッセージですが、お母さんも意識して書いています」

日誌は徐々に漢字が増え、読みやすい字を書きたいとペン習字を習う人も出てくる。毎週木曜日の昼休みには、近くの図書館に行く。借りる本からさまざまな発見があるという。本誌「働く広場」の掲示板には、社内コンテストの上位三人の作文を投稿していただいた。

### 仕事の説明ができることが大事

クレールを操業して六年。全員がすべての作業ができるようになり、大きく成長してきた。そのなよりの証拠は、生産指数が第三期（九九年～二〇〇〇年）の一〇〇から、第八期（〇三年～〇四年）には二二三・四と上がっていることだ。

「一つの仕事だけではなく、複数の仕事ができるようにと考えています。慣れもあると思いますが、仕事量が増えたと何とか時間内にやろうという気持ちが強くなって、そのスピードになってきます。勉強会などの相乗的な効果で二・二三倍の仕事ができるようになったのだと思いますが、すごく能力が上がっていますね」  
長友さんは人事畑で二五年を経験してきました。

「自分のやったことが説明できること

が大事だと思っています。失敗を報告するだけでなく、次はどうするのか、一つ一つの仕事を説明できるためには、自分のしていることを理解し、目標がわかっているといけません。『もう一度考えてくださいよ』と言うと考えます。ものすごく成長しています。個人としては、自分の仕事にきちんと責任がとれるようになること、経営としては、クリーニングは設備面で限界にきていますから、もっといろいろな仕事の柱を増やしたいですね」

社長の高田さんは営業二九年、お客様相談室長からの異動で、それまでに障害



高田社長、長友朗工場長（写真中）と設立時の話をする小島正明滋賀労働局・地方障害者担当官

者との接点はとくになかった。

「丸一年が過ぎて、やっと慣れたところですが、先入観なく、公平に扱うようにしていますね。社員を育てていくのは楽しいですね。充実しています。親会社を通じてもっと仕事をもらうことと、親会社の工場へもっと社員を出せませと、こちらにまた何名か雇用できます。新しい人も入れなければなりませんから、もう少し大きくしたいですね」

これから特例子会社設立を考えている企業へお二人からのメッセージ。

「まだ障害者の雇用をされていない企業は、知的障害者の能力を過少評価していたり、雇用がむずかしいと思っておられたり、すごく費用がかかるのではと思っておられると思います。私たちもそうでしたが、知的障害者とおつきあいましたらいいのだからと一歩退いてしまいましたが、勇気をもって踏み出してくださいと広がってきます。意外にむずかしいものではないですね」と言いたいですね」

「どうしても特別扱いしてしまいますが、ちよつと何かができるなかったり、判断が弱かったり、ふつうの社員と一緒にです」

仕事、朝の勉強会、作業日誌……。前向きで、生き生きとしたみなさんから、エネルギーを分けていただいたような取材だった。